

Mon Nara



Numéro298 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

FEB. 2022 2月号

2022 年度総会開催—「菜宴」にて

2月11日(金・祝)、「菜宴」(奈良市小西町)において、奈良日仏協会の2022年度総会が開催されました。出席者12名(最終14名)、委任状59名、合計71名で、現時点会員総数94名の過半数を越え総会が成立したことを確認後、三野会長を議長に議事が進められ、次のとおり議案が承認されました。1)2021年度活動報告、2)2021年度決算報告、3)2021年度会計監査報告、4)2022年度役員選出、5)2022年度活動計画、6)2022年度予算。

2021年度活動報告では、2020年度にも増して、コロナの影響で活動の縮小を余儀なくされ、総会、理事会の定期開催のほか、事業活動としては、フランス・アラカルト2回、シネ・クラブ1回の活動のみとなり、美術クラブ例会、ガイドクラブ、放送大学との共催公開講演会などが次々と中止となったなかで、会報誌 Mon Nara は、会員からの寄稿など充実した内容となったことが報告されました。2021年度決算は、前年度からの繰越金 1,461,102 円、今期の収入 374,563 円、支出 317,471 円、次年度繰越金額 1,518,194 円となり、三木監事より、証票がきちんと整理され正しく会計処理がされているとの報告がなされました。

2022 年度役員は、前年度と同じく、会長：三野博司、副会長：オリヴィエ・ジャメ、浅井直子、事務局長：杉谷健治、理事：南城守、藤村久美子、中辻純子、高松洋子(会計)、喜多幸子、藺田章恵、監事：三木正義、顧問：坂本成彦、の陣容で取り組むことが承認されました。

2022 年度の計画としては、コロナで先が見通せない状況なので、文化事業は、例年より若干の回数減で予定を組み、これに伴う新年度予算が了承されました。(決算、予算の詳細については、折込別紙をご参照ください)。

議事の終了後、自己紹介や近況報告を交え懇談しましたが、三野会長から、各メンバーが無理のない範囲で参加することが大切で、楽しく活動することをモットーとしたいという言葉があり、またメンバーから、2024 年の 30 周年に向けての発言があるなど、新年度にふさわしい新たな気運に満ちた会合となりました。(事務局)

《三野会長 2022 年度あいさつ》

フランス語には「Bon」を冠した便利な表現があります。Bon appétit, Bon courage, Bon travail, Bon voyage, Bonne soirée, Bonne continuation etc. とあげればきりがありませんが、コロナ禍が始まった2年前から新たに加わったのが「Bon confinement」です。メールの結びで使われ、いっそう丁寧な「Je vous souhaite un bon confinement.」という表現も見かけます。「Confinement」は辞書では「監禁」という物騒な訳語が当てられています。実際フランスではかなりの強制力を持ちます。それに対して、日本の「自粛」はさしずめ「confinement volontaire」だと、在日フランス人が言っています。パンデミックは私たちから「集う文化」を奪いました。他方で、世界中でオンラインによる会議、講演、授業、セミナーが推進されました。メールに「Nous zoomons」と書いてきたフランス人もいます。とはいえ、Zoom は「集う文化」の完全な代用にはなりません。2022 年こそは、「confinement」の生活が終わり、画面越しではなく直に対面して、その場の同じ空気を呼吸する、そうした「集い」の復活を期待しています。



《事務局からのお願い》 会員名簿を更新する時期になりました。記載事項に変更のある方は3月31日までに、下記のいずれかの方法で変更内容をお届けください。1) Mail : sugitani@kcn.jp 2) FAX : 0742-62-1741 3) 郵送 : 〒630-0224 生駒市萩の台 3-2-13 杉谷方 奈良日仏協会事務局 ※ お名前以外の掲載事項は自由に選択することができますので、掲載項目を変更したい方はその旨ご連絡お願いいたします。

総会に参加して

坂本 成彦（さかもとしげひこ）

このところ体調を崩し身体の衰えを感じており、外出の機会を控えている中、コロナ猛威の中での奈良日仏協会総会に出席するかどうか迷いましたが、思い切って出かけました。総会はいつものように円滑な運びで終わり、そのあと出席者 14 名のショートスピーチを拝聴し、みなさんの色々な分野でのお話に改めて元気をいただきました。コロナ禍でワインとつまみの懇談会が出来なかったのは、至極残念でした。

私は 2008 年から 2013 年までの 6 年間、当協会の会長をつとめました、その間のことも含めて、過去のことが蘇り、時が逆戻りしたように楽しいひと時でした。体調が許せば、そしてコロナが収まれば、オリンピック前のフランスに、古いパリ、新しいパリに、是非行ってみたいです。三野会長はご挨拶の中で、今年で会長 9 年目になると話されましたが、2024 年の当協会創立 30 周年記念行事を取り仕切っていただけることを願っています。



法人会員紹介

株式会社 NARA FRANCE

<https://www.narafrance.com/>

2020 年 5 月に、奈良県生駒市に日仏通訳・翻訳、日仏ビジネスサポートの会社、株式会社 NARA FRANCE を起業いたしました。当方が 17 年間勤めていた在日フランス大使館での経験を活かし、商談や会議の日仏通訳を得意としておりますが、コロナ禍でフランスからリアルな来日がないため、オンラインでの商談通訳やオンラインセミナーでの司会、通訳を実施しております。またフランス最新トレンド情報を日本企業に提供しております。

昨年は、信州大学と高知大学でフランス経営学やアントレプレナーシップ（起業家論）の講義を実施しました。また現在は月に一度、学園前の「住まいと暮らしのぷらっと HOME」で「あいさつからはじめるフランス語講座」を開講しておりますのでご興味がある方はぜひお気軽にメールにておたずねください。



連絡先: kaoruko.hayashi@narafrance.com
 所在地: 奈良県生駒市
 代表: 林薫子（はやし かおるこ）
 写真: 日経のオンラインセミナーでの通訳兼司会進行中の林代表

野菜ダイニング「菜宴」

<https://potager-rice.com/>

近鉄奈良駅から徒歩 1 分の好立地にあります。コロナ禍より発売を始めたレトルト食品の『ポタジェ・ライス』コンセプトはスープで食べるご飯！美味しい非常食です。一般ユーザー様から地方自治体、企業などから備蓄食品、災害用保存食として支持されております。郵便局での販売は拡大し現在は近畿 2 府 4 県 3,200 局で「ふるさと小包」としてお取扱いただいております。販路拡大の為、地元テレビ局でポタジェライスの番組やテレビ CM を製作し、同じ内容を YouTube でも放送しております。是非ご検索下さいませ。

今春には新商品の炊飯器で作る本格パエリア！その名も『パエー釜ジャ』を全国発売予定です。2 合のお米洗米し、しっかりと水を切り『パエー釜ジャ』を入れスイッチポンで OK。料理が苦手な方でも本格的パエリアがご家庭で味わえます。

★「ポタジェ・ライス」購入サイトは上記

奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F Tel : 0742-26-0835 不定休
 昼 11:00～15:00 (14:30 ラストオーダー)
 夜 17:00～22:30 (21:30 ラストオーダー)
 店長: 久保田耕基 (くぼたこうき)



※法人会員のワインショップ「サン・ヴァンサン」の紹介は、6 月号に掲載する予定です。(編集部)

第 149 回フランス・アラカルト「ドイツとフランスに暮らしてみて」

1 月 22 日（土）、生駒セイセイビル会議室で、第 149 回フランス・アラカルトを開催し、会員 11 名と一般 1 名の方に参加いただきました。ハンブルクに 11 年、コルマルに 3 年と、独仏両国に住まわれた講師の辻みち代さんから、実生活の印象やデータによる両国の比較を交え、豊富な体験を映像を使ってお話しいただき、最後にドイツ語のミニレッスンまでしていただきました。主にお子さんの教育でのご苦労が多かったようで、ドイツで自由な育ち方をしたので、日本に帰って来てから、協調性を重んじるクラスの雰囲気になじめず大変だったとのこと。印象的だったのは、ドイツでお昼にお嬢さんがピアノの練習をしていたら、庭で昼寝をする習慣の隣家のご主人が、薔薇を一本持ってやってきて、「お嬢さんにどうぞ」と言い、「ピアノを聴けて嬉しいし、ドイツの音楽をリスpektしてもらってありがたいが、毎日はきつい」と話したということで、洒落た苦情の言い方に感心しました。独仏の比較では、フランスは時間をかけて食べながら、アペリティフやワイン、コニャックなどいろんな飲物を飲むが、ドイツはあまり食べず食後にビールやワインを飲むこと。頼みごとをした場合、フランスでは約束しておいて期日を守らないなどいい加減なところがある一方、ドイツは不愛想に断るがやると決めたらやる。しかしドイツには柔軟性がないし、日本の情緒を繊細に理解しているのはフランスのほうだ、と両国の一長一短をお話されました。（杉谷健治）

第二次大戦後、ドイツが東西二つに分断されたとき、「私はあまりにもドイツが好きだから、ドイツが二つもあってうれしい」と、痛烈な皮肉を発したフランスの作家がいました。フランス人にとっては、普仏戦争、第一次大戦、第二次大戦と三度にわたって自分たちの国土を蹂躪したドイツは、大きな脅威です。そんなドイツは、二つに分かれて弱小の国にとどまっていたほしい。ふたたびヨーロッパの強国になって欲しくはないという本音がそこに見られます。他方で、ドイツの音楽や哲学、その高い文化に魅せられた人々も数多くいます。ただ、そのなかには第二次大戦中、ドイツ文化とフランス文化の融合を夢見てナチスドイツに加担したために、戦後になって粛清された人々もあります。独仏の歴史を見ると、つくづく隣国とのつきあいの難しさを感じます。

辻さんが作成された仏独の比較表はたいへん便利なものですが、それによると現在のドイツは人口や GDP でフランスを上回ります。EU 内での覇権争いはいつまでも続くでしょう。辻さんがハンブルクで生活されたのは、東西に分断された時代のドイツですが、ベルリンの壁崩壊の 1989 年から、こんどはコルマルでの生活が始まります。まさに生活の現場から報告されたドイツとフランスの二つの国事情、とても興味深いお話でした。政治のレベルの角逐とは別に、文化や生活のレベルでのお互いの相違を認めた上での交流、その大切さが伝わってきました。（三野博司）

だらだら生活が身についてしまったのか、何とかなさりと準備もろくにせず本番を迎えました。メモを見ながらの予定が、その場で思いつくままに脈絡なく話してしまい、結果、何を言いたいのかはっきり分からないまま終わったこと、反省しております。娘の出生地でもある第 2 の故郷ハンブルクと、独特の料理と可愛らしい街並みで大いに楽しませてくれて、ヨーロッパの多様性を実感できたコルマルでの滞在について話をする機会を与えてくださったお蔭で、これまで突っ走ってきた半生（というより 4 分の 3 生以上ですね）をしばし振り返ることができました。思い出深い写真に見入ってしまったのも、なかなか準備が進まなかった理由の一つでしたが、当日は拙い話にも拘わらず、ご出席の皆様には熱心に聞いてくださったこと、大変感謝しております。アラカルトの終わった夜、アルザスワイン gewurtstraminer を飲みながら、当時良く行ったレストラン Trois Poissons のおいしかった魚介料理を久しぶりに思い出しました。2002 年以来訪れていないコルマルへの 20 年振りの再訪を今年は何とか叶えたいと切に願っております。（辻みち代）



上：ハンブルクの隣人家族と

下：ハンブルク日本人学校卒業証書授与式



「モリエールの喜劇」(10)『スカパンの悪だくみ』(Les Fourberies de Scapin, 1671)

山本 邦彦 (やまもと くにひこ)

『スカパンの悪だくみ』はイタリアの笑劇コメディ・デラルテの技法を巧みに取り入れながら作者独自のファンタジーを最大限に膨らませた3幕散文の痛快喜劇です。

ジェロントの息子レアンドルとアルガントの息子オクターヴは、それぞれ、父親の旅行中に無断で、素性の怪しい女性イアサントとゼルビネットと結婚の約束をしています。旅から戻った父親はふたりとも事情を知ってかんかんに怒りますが、レアンドルの従僕スカパンが持ち前の機略を発揮して、2件ともうまく解決するという話です。

至るところ笑いを誘う場面だらけですが、最大の見せ場は2カ所あります。まず第2幕第7景。スカパンがジェロントに「レアンドルがトルコの軍艦に連れ去られ、身代金を要求されている」と嘘をつく場面です。大事な息子の命がかかっている。だが、大金は払いたくない。思わず「なんだってまた軍艦なんぞに乗りこんだんだ？」と叫びます。スカパンが、払わざるを得ない事情をあれこれと説明するたびに、ジェロントはこの台詞をその後6回も繰り返します。この台詞は実は先輩作家シラノからの完全な盗用でしたが、息子への愛情とお金への執着の間で揺れるジェロントの内心の葛藤を見事に表現しています。

もう1カ所は第3幕第2景。またもやスカパンがジェロントに、「殺し屋が狙っているから、隠れなさい」と嘘をついて、大袋に入れる場面です。それからがスカパンの、いやスカパン役者の腕の見せ所です。殺し屋の声色と自分の声を使い分け、棍棒で袋を打ちまくりまわります。そしてついには何人もの刺客の作り声をひとりでやってみせます。

古典主義の立場に立つ峻厳な批評家ボワローは、「スカパンがもぐり込むあのおかしな袋の中に、私はもはや『人間嫌い』の作者を認めることはできない」と言って嘆きました。もぐり込んだのはスカパンではなくジェロントのほうではありましたが、...



右：ジャン・ルイ・パロー (スカパン)
左：ピエール・ベルタン (ジェロント)

私の好きなワイン (4)「ブルゴーニュ・ワイン」 小寺 順子 (こてら じゅんこ)

ボルドー・ワインがワインの王様なら、ブルゴーニュ・ワインはさしずめワインの女王様といったところだろう。私自身に関していえばボルドーよりブルゴーニュの方が面白い。何故かというところでは、セカンドやサードを除くと、一つのシャトーで、一種類のワインしか作られない。それに対してブルゴーニュでは、同じ銘柄のワインをいくつもの生産者が作っている。当然ドメーヌによって味が違う。好みの物を探し当てるのが面白い。私はクロ・ド・ブージョのルイジャドの赤ワインと白のモンラッシェ (右下画像) が好きである。初めてクロ・ド・ブージョを飲んだ時は、滑らかなビロードのような味に思えた。モンラッシェを初めて飲んだ時は、ダイヤモンドのようにきらきら光っているように思えた。

ブルゴーニュ・ワインは、シャブリ、コート・ドール、コート・シャロネーズ、マコネ、ボジョレーの地域から成る。その中のコート・ドールはディジョンからマランジュにかけてあり、北のコート・ド・ヌイと南のコート・ド・ボヌに分かれている。その北にはシャブリ地区が飛び地のようであり、南の方ではコート・シャロネーズとマコネーズ、そしてヌーボーで有名なボジョレー地区がある。コート・ドールで目を引くのがボヌロマネという村で、ここではかの有名なロマネ・コンティが作られる。他にラロマネ、ロマネ・サンヴィヴァン、ラターシュ、リュシュブール、ラグランリュなど、ワインファンにとっては垂涎の的であるグランクリュがある。この辺りは非常に高額で、一般市民には手がでない。私も飲んだことが無い。あと、白ワインではコート・ド・ボヌのムルソーが有名である。これはブルミエクリュだが、実際はグランクリュの実力を持っている。税金の額を減らしてワインの価格を下げてある、お値打ちものだ。ブルゴーニュの話をするとうれしい。



ホームズ物語とフランス (6)

長谷川 明子 (はせがわ あきこ)

ホームズが活躍した時代、ヨーロッパ列強は植民地拡大に躍起になっていたが、バランスを保ちながら戦争を回避するための巧みな外交戦略が必要であり、特に外交文書の交換は秘密裏に行われなければならなかった。ホームズ物語の中の《海軍条約文書事件》(1893年)《第二の汚点》(1903年)《ブルースパーティントン設計書》(1908年)の3作品は、条約文書や設計書などを手に入れようと暗躍する国際スパイの逮捕劇が絡んでいる。中でも、《海軍条約文書事件》(The Naval Treaty)は英国、イタリア間で交わされた秘密条約文書に関するもので、アフリカにおける植民地問題でフランスと対立していた英国が、地中海におけるフランス海軍の動きに神経を尖らせ、打開策としてイタリアに働きかけたものである。スーダン及びエジプトを占有する英国の権利をイタリアが認め、リビアを占有するイタリアの権利を英国が認めるという内容で、三国同盟(Tripartite Pact, 独、奥、伊、1892年)にかかわるものでもあった。後に英国は三国協商(Triple Entente, 英、仏、露、1907年)を結ぶことになるが、ドイツはもとより、当時はフランス、ロシアにも絶対に知られたくない文書だった。こうした世界情勢をもとに、《最後の挨拶》(The Last Bow, 1917年)は、英国嫌いのアイルランド系アメリカ人スパイに成りすまして、ドイツ側スパイの大物を逮捕するホームズの姿を描いている。第一次世界大戦の始まりを憂えつつ、この作品を最後にホームズは読者の前から姿を消すのである。

一方、作家コナン・ドイルは第一次世界大戦中も精力的に活動을続け、義勇兵としてフランスの前線へも出かけている。ドイツ兵の咳すら聞こえる塹壕にも入っていった。「フランス兵はヨーロッパ軍の伊達男で、塹壕にいる将校たちがズボンを丹念にプレスしていた」などの記事もある(『わが思い出と冒険』コナン・ドイル自伝より)。勇気と好奇心にあふれ、戦場ではシャーロック・ホームズと呼ばれたりもした、コナン・ドイルであるが、この戦争で息子や弟、甥たちなど多くの身内を失い、後年心霊主義に傾倒していったといわれている。

※Mon Nara 2021年10月号の「ホームズ物語とフランス」(4)は、(5)の誤りでした。謹んでお詫び申し上げます。(編集部)



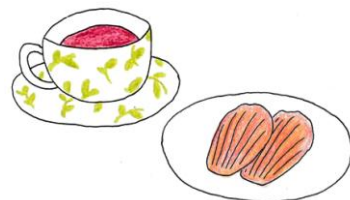
赤い帯の部分「シャーロック・ホームズ、ドイツのスパイをだし抜く」が印象的。「最後の挨拶」が掲載された「ストランド・マガジン」1917年9月号表紙

ブルースト雑感「2022年は没後百年」 浅井 直子 (あさい なおこ)

小説『失われた時を求めて』の作者マルセル・ブルースト(1871-1922)は、今年11月18日に没後百年を迎えます。昨年2021年は生誕150年を祝いました。コロナ禍ゆえに、フランスでは規模を縮小して行事が開催され、日本ではリモートでの講演会が開催されるなどしましたが、数多の素晴らしい講演を自宅に居ながらにして聴取できたのはありがたいことでした。そのなかで、オンラインによる日本ブルースト研究会での「ブルーストの大衆化」をテーマにした講演と質疑応答は、とても興味深いものでした。

『失われた時を求めて』は、中年にさしかかった主人公の男性が、ある冬の日、偶然、紅茶に浸したマドレーヌを味わうと不思議な「幸福感」に充たされ、長い間忘れていた子供時代の記憶が蘇るところから物語が始まります。この有名な挿話がひとり歩きして、近年、味や香りから記憶が蘇る現象を指す「ブルースト効果」という言葉が、定着しつつあります。この効果を実験するために、勉強前に「マドレーヌ」のかわりに「きのこの山」「たけのこの里」などのチョコレート菓子を自らすすんで食べてよく味わい、試験に合格しようとする受験生が登場する小説をはじめ、ブルーストをもじった様々な音楽や映画の作品が生まれています。これは、ブルーストの大衆化のひとつのあらわれで、ブルーストを知るきっかけになるというメリットがあるものの、肝心のマドレーヌの挿話がまったく異なる意味合いで用いられているのが気になります。ブルーストの小説では、「偶然」口にしたマドレーヌの風味から、予期していなかった思い出が蘇り、その「無意志的記憶現象」を解明することが、小説全体を支える柱になっているのですが、忘れたことを「意識的に」思い出そうとするのは、主人公自身が批判するあり方です。それも一種の「イロニー」ととって、現代の创作者たちの発想源に生かされている、と考えることもできますが…。

没後百年の今年も、予期せぬブルースト的な出会いに恵まれるかもしれません。とはいえ、このような期待を想像すること自体、ブルーストからは「こらこら」と言われそうな、非ブルースト的な感情かもしれません。



Le Japon retrouvé (1) « Nos amies les machines » 日本再発見「機械は友だち」

パチスト・レタヨ

En Mars prochain, cela fera 13 ans depuis mon arrivée au Japon. C'est "un tour de roue astrologique japonais complet +1 an". Que le temps passe vite! Choisir de vivre ici dans un pays si lointain, géographiquement comme culturellement apporte son lot de surprises au quotidien. A l'occasion de cet "anniversaire", permettez-moi de partager avec vous des petites anecdotes qui m'ont marquées et/ou qui continuent de me surprendre et de m'amuser. Aujourd'hui, je voudrais vous parler des "machines".

Vu de l'étranger, le Japon a depuis toujours une image de "pays des robots". Le robot Asimo de Honda, le petit chien Aibo de Sony, le Geminoid de Ishiguro-sensei, les robots géants de Gundam et Evangelion sont autant d'images de machines savantes qui parsèment le parcours de l'étudiant en japonais. Pourtant, à mon arrivée à l'aéroport du Kansai en 2009, ce sont des machines bien moins sophistiquées qui m'ont fait grande impression. A peine le pied poser sur l'escalator, *ding* la voix d'une hôtesse m'invite à faire attention à mes orteils! Quelques mètres plus loin, c'est le guichet automatique qui m'invite à faire ma sélection de billets de train, et rebelote dans l'ascenseur pour le choix de l'étage!

En France, les machines sont désincarnées, comme des esclaves de métal assujettis au service de l'homme. Elles sont en général très mal entretenues contrairement au Japon où elles sont régulièrement inspectées et nettoyées. Alors, entendre une voix humaine émaner de ces objets "du banal" et les voir être choyées avec tant d'attention c'était très rafraîchissant... ou plutôt ça faisait chaud au cœur! A y penser, cela traduit deux aspects de la société japonaise. Tout d'abord l'omoiyari collectif ou sensibilité altruiste d'une société soi-disant uniforme mais qui pense aux besoins de ses membres aux facultés diminuées (personnes malvoyantes dans le cas présent). Ensuite, la reconnaissance ou la gratitude envers des objets inanimés. Cette voix nous rappelle non pas le "service rendu", expression de forme passive, mais le "yakuwari" - leur rôle, en tant qu'acteurs de notre quotidien. Bref, comme le chantait le groupe Styx dans les années 80: Domo Arigato Mr Roboto! (Baptiste Retailleau)

今年の3月で、来日して13年になります。「日本の十二支一周完走+1年」です。時の経過の早いこと！ 地理的・文化的に遠く離れたこの国に暮らすことを選んだために、日常にいくつかの驚きをもたらされました。この「記念」の機会に、私にとって印象的だったり、いまなお驚かされ楽しませてくれる、ちょっとしたエピソードを、みなさまと分かちあえればと思います。今回は、「機械 machines」のことをとりあげます。

外国人からみると、日本はずっと前から「ロボットの国」というイメージがあります。日本語の勉強の道が、ホンダの「アシモ」(右画像)、ソニーの子犬「アイボ」、石黒先生の「ジェミノイド」、ガンダムやエヴァンゲリオンのような、知的機械のイメージに染まっています。しかし、2009年に関西空港に着いた時に私を強く印象づけたのは、それほど高度ではない機械たちでした。エスカレーターに足をのせるやいなや、呼鈴が鳴り女性の案内の声が私に足元注意を促すのです！ 数メートル先には自動切符売場があり、列車の切符を選ぶよう促し、さらにはエレベーターの階を選ぶのも同様です！

フランスでは、機械は実在感が希薄で、人間に奉仕するための金属製の奴隷のようで、定期的に検査され掃除されている日本とは違って、一般的には整備がゆきとどいていません。それゆえに、これらの「よくある」事物から人間の声が発せられるのを聞き、それらの事物が十分に注意して大事に扱われているのを見るのは、とても新鮮でした。というよりむしろ、心を温めてくれました！ 今振り返ってみると、日本社会の二つの側面を示しているように思われます。まずは、集団に共有されている思いやり、あるいは画一的といわれる社会の利他的な感受性。それは能力の劣ったメンバー（この場合には視力の弱い人々）への必要を想ったことです。続いて、無生物の事物のありがたさを認めて感謝する気持ち。この声が思い起こさせるのは、(機械による)受身形の「サービス提供」ではなく、私たちの日常生活を能動的に担ってくれるものとしての「役割」です。一言でいうなら、1980年代にロックグループのスティクス (Styx) が歌っていたように、「ドモ アリガト ミスターロボット！」なのです。



コロナ禍のフランス学校事情

中西 さおり

大阪で生まれ育ち実家のある奈良は馴染み深い町です。そんな私が、2007年よりパリで生活を始めはや15年、現在はパリ郊外のフォンテーヌブローの近くに引っ越しし、仕事と双子の子育てに奮闘しながら森に囲まれた自然あふれる町で生活をしています。皆様もご存じのように、フランスは昨年末より再びコロナ感染者数が急激に上昇してきました。今回はフランスのコロナ事情を皆様にお伝えしたいと思います。

ニュースなどで初めてコロナウイルスの名前を聞き始めた2年前、フランスでマスクをしている人はほとんどいませんでした。今ではマスク着用が義務付けられ、フランス人もマスク？とすっかり定着してきました。長期にわたる外出禁止令が出された時、誰もが不安な毎日を過ごさなければなりませんでした。フランス政府の対応は比較的早く、具体的な指示があり、外国人の私でさえどうすればいいのか迷わず判断することができました。

現在フランスではワクチンの義務化に向けて大統領は躍起になっていますが、先日も「**Emmerder les non-vaccinés** 未接種者をうんざりさせたい」(フランス語では「うんざり」よりもかなりショッキングな言い方ですが)と発言し、ワクチン義務化に反対するデモが全国で広がっています。それでも、avec covid (コロナと共に)と我々は日々の生活を送らなければなりません。

私は、オー＝ド＝セーヌ (Hauts-de-Seine) 県にあるフランスの公立小学校内にあるインターナショナル・セクションで日本語(国語)を教えています。子供たちのほとんどがフランスで生まれ、日本にルーツのある日仏家庭でフランス語、日本語を話すバイリンガルです。

学校内での衛生プロトコルの規則は毎週、いえ毎日のように変わり、その度に教師も保護者も生徒も対応に追われる日々です。例えば、12歳以下の子供たちはクラスで陽性反応の生徒が1名出た場合、クラスの全員が当日、2日後、4日後と各自が自宅で自己検査をし、陰性の場合は問題なく登校が認められます。陽性の場合は7日間の自宅待機、その後同じく検査をし、陰性の場合は登校可能となります。フランス教育省よりガイドラインが発表されているので、その指示に従って各自が検査、自宅待機をし、みな慌てることなく行動できているように思います。とは言え、保護者からは「人生でこんなにも薬局に通うのは初めてだ」という声をあちらこちらで聞きます。冬時間の今(1月下旬)、日の出が8時30分ごろのフランスですが、朝のまだ暗い中、登校前に検査所で検査をしている子供たちの姿もよく見かけました。

さて、私たち日本セクションの生徒が自宅待機になった場合は教室にパソコンを準備し、教室授業の様子をオンラインで配信し、自宅待機になっている子供たちも一緒に参加できるようにハイブリッド授業で対応しています。

また、4年生のクラスは毎週月曜日の朝、水泳の授業が行われていますが(フランスは校内にプールがないのでバスに乗って市営プールに行きます。室内プールのため冬でも水泳の授業があります)、その授業もやはり政府の判断で継続したり中止になったりと毎週のように変わっている状況です。

フランスの小学校は日本と違ってお昼休みは11時30分から13時30分と2時間あります。ほとんどの生徒は食堂で給食を食べますが、自宅に帰って昼食を取っても構いません。給食の時間の管理は学校の教師ではなく学童の指導員が行います。

我が子の学校では学童の指導員がコロナに感染したため、急遽給食が中止となり、保護者は自宅で昼食を食べさせるために子供を学校へ迎えに行かなければなりませんでした。また、毎回変わる衛生プロトコルの対応に追われる教師のストライキも実施され、クラスが閉鎖、と多くの保護者がテレワークせざるを得ない状況が続いています。コロナと共存しながらの生活に慣れてきたとは言え、課題がまだまだ山積みされています。

先日、4年生の授業で百人一首について勉強しました。

『天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出し月かも』

遣唐使の阿倍仲麻呂が遠い地から奈良の三笠山を想ったように、フランスで遠く離れた日本へ想いを馳せながらコロナの終息を願う毎日です。



フォンテーヌブロー宮殿



抗原検査を受けるために並んでいる様子



自己検査キット

グルノーブルにて

神澤 透 (かんざわ とおる)

ぼくは、1992 年から 2 年間グルノーブル政治学院 (Institut d'Etudes Politique de Grenoble, 通称 Science-Po シアンスポ) に留学をしていました。その頃のグルノーブルの様子をお伝え出来ればと思います。

グルノーブルというと、1968 年の冬季オリンピックを思い出される方もいらっしゃると思います。その時の記録映画は、『白い恋人たち』(原題: *13 Jours en France* 監督: クロード・ルルーシュ) と邦題がつけられ、またフランシス・レイ作曲の同タイトル (日本語も仏語も) のテーマ音楽は世界のスタンダードナンバーとなっています。

グルノーブルは、冬季オリンピックが開かれる位ですから、周りを高い山々に囲まれ、冬はかなり寒くなります。他方夏はやたら暑く、コルシカ島のアジャクシオより気温の高い日が少なくなかったです。そのような盆地の街です。

パリからは、直通の TGV で 3 時間です。人口 16 万人で、郊外人口を合わせると 40 万人の都市圏です。研究学園都市として有名でシアンスポの他、グルノーブル第一大学、グルノーブル第二大学、グルノーブル第三大学 (Stendhal) (2016 年より 3 つの大学はグルノーブル-アルプ大学となっています)、グルノーブル理工科学学校 (INPG)、グルノーブル経営学校 (EMG)、フランス国立情報学研究所 (INRIA)、グルノーブル原子力研究センター、原子力・代替エネルギー庁 (CEA)、ヨーロッパシンクロトロン放射光施設 (ESRF) があります。グルノーブル第三大学が Stendhal と名づけられている通り作家スタンダールの生地であり、記念館も設立されています。また、ジャックリーヌ・ケネディ・オナシスやフランソワーズ・サガンはグルノーブル大学に通っていました。

街には現代的な路面電車 (トラム) が走り、北部の郊外からグルノーブル駅を経て繁華街を通り大学へと繋がっています (他にも 2 系統あります)。大学に繋がっている為、朝夕、昼時のトラム (当時は 3 両編成、今は 6 両編成のもの) は、東京の地下鉄並みに超満員になります。

学生は、勉強熱心な人が多く、図書館はいつも満員です。基本的に親からの仕送りは受けずに生活しているので、かなりの節約生活をしています。学食での食事 (12 フラン程度、カルネもあり) は高く感じるらしく、ミニトラックで売りに来るパン屋さんのフライドポテトを挟んだだけのバゲット (3 フラン) 等を昼食にする人を多く見かけました。

雑誌 *L'Express* が、毎年フランスの住みやすい街特集を組んでいたのですが、当時グルノーブルは 3 年連続でナンバーワンになっていました。郷土愛が強い人が多いのです。グルノーブルをアルプスの中心 (フレンチアルプスではなく、全アルプスの中で) であると言ったり、ローマ時代以来の古い歴史を誇ったり、グルノーブルの文化水準の高さ (各種大学、研究機関のみではなく、フランスでも指折りの大きな美術館もあります) に言及する人々で溢れています (言うまでもないがといった口調です)。

周りを山々で囲まれ、自然公園がいくつかあるので、観光客も多いです。特にヴェルコール地方自然公園は、フランス初の地方立自然公園です。生物多様性には目を見張るものがあります。135 種の繁殖鳥類、65 種の哺乳動物種、17 種の爬虫類および両生類など多数の動物種が集まっています。自然公園の全てに直通のバスが走っています。また冬場になると冬季オリンピックの山岳会場となったシャムルースや、富士山並みの高度で氷河になっているドゥザルプなどのスキー場へのバスもあります。

このように色々な側面を持つ街です。料理面では、グルノーブル地方のオリジナル料理で、世界中で食べられている付け合わせのグラタン風ポテト「グラタン・ドーフィノワ *gratin dauphinois*」があります。



随想「啓蒙思想家ヴォルテール」

角田 茂 (つのだ しげる)

Je ne suis pas d'accord avec ce que vous dites, mais je défendrai jusqu'à la mort votre droit de le dire.

私はあなたの意見に反対である。しかし、あなたがそのように発言する権利は、命をかけて守る。

Voltaire (Tallentyre: The Friends of Voltaire. 1906)

無知と悲慘とがある社会において、必要とされるものは知識である。18世紀の中頃、この知識はフランスで体系化され、『百科全書』(1751-1772)が刊行された。ディドロ、ダランベールが編集し、ヴォルテール(本名: François-Marie Arouet: 1694-1778)など、当時の啓蒙思想家(知識人)が執筆している。後世の歴史家は、このフランス18世紀を *Siècle des lumières* と呼んだ。フランス語で光の複数形 *lumières* は知識であり、本来「知識の世紀」と日本語に訳すべきであるが、ドイツ語の *Aufklärungszeit* や英語の *Age of enlightenment* の影響を受けて、日本でも「啓蒙の世紀」と呼ぶようになった。



18世紀の終わりになると、この自由と平等を求める啓蒙思想に鼓舞されて、米国独立革命(1775-1783)やフランス革命(1789-1795)などの市民革命が起こった。人間の自由と平等がはじめて国家レベルで宣言されたのは、1776年の米国独立宣言においてである。宣言が出されると、独立の承認と独立戦争への協力を求めて、ベンジャミン・フランクリンが米国大使としてパリに派遣された。彼は啓蒙思想家たちに暖かく迎えられ、独立戦争について問われると、「うまく行くでしょう (Ça ira!)」といつも口癖のように言っていたようである。パリまで出て来てフランクリンと会見したヴォルテールは、勧められてフリーメイソン(フリーメイソンリーの会員)となっている。独立戦争の方は、最終的には1778年に仏米防衛協定が締結され、1783年のパリ条約によって独立戦争は終了する。しかし、これによってフランスは大きな負債を抱え、フランス革命の大きな要因を作ることになった。

米国独立宣言より前の話になるが、1760年、ヴォルテールはパリから離れ、ジュネーヴ近郊のフェルネ(現在はフェルネ＝ヴォルテール)に定住した。フランクリンの雷に関する実験論文を知ると、自宅の庭に、彼の発明した避雷針を立てている。この高さ30mの避雷針建造にあたっては、ヴォルテールの愛人、エミリー・デュ・シャトレの影響があったと思われる。彼女はニュートンの『プリンキピア』をフランス語に翻訳した物理学者であった。

スイスは時計産業で有名である。1870年の時点で、世界で製造される時計の7割がスイス製であったと言われている。この時計産業の発展に、ヴォルテールは貢献している。時代は遡るが、1598年、フランス国王アンリ4世はナントの勅令を出し、プロテスタント信徒(ユグノー)に対して信仰の自由を認めた。ところが1685年、ルイ14世はフォンテーヌブローの勅令を出して、ナントの勅令を廃止した。その結果、高度な技術を持つユグノーの職人たちは、オランダやスイスに亡命することになった。1770年、ヴォルテールはフェルネに時計職人養成と製造販売を兼ねた大規模な工房を造るとともに、ヨーロッパ各国や米国にスイス製時計を売り込む政策をとった。親交のあったロシア皇帝エカテリーナ2世にも売り込んでいたようである。話は飛ぶが、劇作家でもあったヴォルテールは、バーンスタインのコミカル・オペレッタ『キャンディード』の原作者でもあり、1776年にはフェルネの街に劇場を建設し、初演の時にはパリから大物俳優を招いて演劇を行ったと言われている。

2015年、ムハンマドの風刺画を掲載した週刊紙『シャルリー・エブド』の事務所が、2人のイスラム過激派テロリストによって襲撃され、警察官2人を含む12人が殺害された。この事件をきっかけとして、表現の自由を求め、テロを批判する運動が、“Je suis Charlie”や“I am Charlie”のプラカードを掲げて地球規模で広まった。私はあらゆるテロに反対であるが、表現の自由について、これらの運動には、いささか疑問を感じている。18世紀フランスにおいて、ヴォルテールなど啓蒙思想家が求めた表現の自由(批判精神: *esprit critique*)は、権力を批判する自由であり、弱者を風刺したり、他者の私生活を暴露する自由ではなかった。ヘイトスピーチなど言語道断である。啓蒙の世紀に養われた風刺の手本は、ボーマルシェの戯曲やチャプリンの映画の中にあると私は考えている。

大学生が考えるフランスのイメージ 2021 ：グルメ・ブランドからイノベーションへ??

林 薫子（はやし かおるこ）

2021 年の秋に、大学院時代の先輩からお声がけいただき信州大学と高知大学の経営学・経済学部の学生に「経営学特別講義 フランス編」としてフランスのビジネスや働き方について講義をしました。フランス語やフランス文学の学生ではなく、どちらかという「フランス」にあまり親しみのない学生に、まずはフランスのイメージについてアンケートをとりました。結果は以下の通りです。（アンケート回答数：信州大学・高知大学の学生 113 名）

質問 1 フランスのイメージは？（複数回答可能）

1. 食・グルメ	63 票
2. ファッション・ブランド	56 票
3. 観光	41 票
4. アート	26 票

質問 2 知っているフランス企業名をあげてください。（複数回答可）

1. CHANEL	31 票
2. Louis Vuitton	28 票
3. Renault	16 票

5 票－10 票以内：Airbus, Hermes, Dior, Peugeot

少数票：Cartier, YSL, Baccarat, Waterman, LVMH, Spring court, Evian, Lacoste, APC, Agnèsb, Citroen, Michelin, Total, Dassault, AXA, La Roche Posay, Guerlain, Embryolisse, Lancome, L'oréal Paris, L'Occitane, Chloé, Orangina, Le coq sportif, Airfrance, Carrefour



リアル講義風景、
でもアクリル板越しです。

やはりフランスのイメージといえば「食・グルメ・ファッション・ブランド」が圧倒的で、知っているフランス企業のトップもハイブランドあるいは車のメーカーとなりました。確かにファッションやコスメのブランドが多いけれども、今の大学生はフランスの企業名、ブランド名をよく知っているな。とあらためて感心しました。

しかしながら今回の講義では、現マクロン大統領がデジタル担当相時代から取り組んでいるフランスの経済政策「La French Tech（フレンチテック）」を紹介し、フランスがあらたな経済基盤としてスタートアップ推しであることを説明しました。そして「グルメとブランド」のイメージの強いフランスですがテクノロジー、イノベーション企業も多数あって、例えば、ソフトバンクのペッパーというロボットは元々フランスのアルデバラン社の NAO というロボットとのコラボレーションであることなど具体的な事例も紹介しました。また大学生にとってフランス企業の代表格である Louis Vuitton を中心とするラグジュアリーグループ企業 LVMH 社では現在デジタル化をすすめるためにスタートアップと積極的に協業しています。

大学生はこのようなフランスの新しいイメージに驚きと発見を感じ、さらには文化や伝統、ブランド企業などがあるにも関わらず、経済政策としてスタートアップを支援するなど、フランスの政府や大企業が新しい取組みを積極的にすすめる姿勢と現在の日本の姿を比較する大学生もいました。

フランスと日本のどちらがいい。ということではなく、まずは広く世界に興味を持ち、好奇心をもって、理解しようとする。そのような機会になればいいなと思った講義でした。そしてやはりリモートだけではなく「リアル」な出会いはいいなと思いました。

フランスを愛する皆様との交流を楽しみに 森岡 由紀子(もりおか ゆきこ)

“Mesdames et messieurs, je suis votre chef de cabine.”

以前私が KLM オランダ航空チーフパーサーだった頃のフランス語の機内アナウンスです。

秋田県出身で、幼い頃から外国に興味深々で、父のレコードコレクションのシャンソンをまねて歌って育ち、東京の大学でフランス文学を専攻しました。とはいえ、フランス語会話は?のまま卒業し、ちゃんと勉強したのは KLM 入社後です。

大学卒業後、スチュワーデス (CA) になり、日本＝オランダ間を乗務しました。オランダ語ができればオランダベースで世界に飛べるよという同僚に触発されてオランダ語を学び、3年後にオランダから世界へ飛びました。現在までに訪れた国は 70 カ国くらいです。



オランダは、九州ほどの面積ですが、18 世紀には日本など世界中で貿易をした国で、人々は発想が豊かで先進的、外国語教育も盛んで殆どの人が数ヶ国語を話します。KLM の昇進試験は英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語の会話試験で、プレゼンして質疑応答に答えるもので私もフランス語を学びました。でも、KLM をやめたら使わなくなって忘れてしまいました。

KLM 時代に知り合ったアメリカ人と結婚して 3 児の母となり、子育ては東京、香港、アメリカでしました。2020 年までアメリカの音楽の都、テネシー州メンフィス在住でした。双子の息子がジャズを学んだことがきっかけでジャズラジオ局 DJ になって、フランスのジャズアーティスト多数と知り合い、フランスジャズの紹介番組をいくつか作成しました。Alliance Française にも参加しました。

子供達が大学を卒業し、主人が退職して夫婦で奈良県に引っ越しました。久々の日本は食べ物が美味しく、人が親切なのが身に染みます。奈良でフランスを愛する皆様との交流を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

初めてのノアン

灘先 絵美 (なださき えみ)

昨年の夏、入会しました。フランス語は京都と奈良での学生時代に学び、大学院に入ってからパリへ留学しました。帰国してから今年で 7 年が経とうとしています。渡仏後の晩秋、私はフランス中部のベリー地方にあるノアンへ行きました。そこは、ジョルジュ・サンドが幼少の頃から晩年まで、多くの時間を過ごした場所であり、「サンドをテーマに論文を書くのなら、一度は行くべき!」と心に決めていたので、目的地までの行き方や知っていると便利な情報まで、下調べは抜かりなく行いました。

パリのオーステルリッツ駅からトゥールーズ行きの電車に乗り、揺られること約 2 時間、シャトールーに到着します。シャトールーからノアンまでは、バスで行かなければならないのですが、目的のバス停を見つけるのに少々戸惑いました。何度もシュミレーションをしていたつもりだったのですが…。予想外のことが起こる国、C'est la France! 驚くことに、バス乗り場の場所が変更になっており、人に尋ねるにも、不思議なくらいに人がいなかったのです。やっとの思いで、マダム 2 人に会い、ここからノアンに行きたいのだが、バス乗り場を教えて欲しいと伝えました。ところが「ノオン? オワン?」と私の「Nohant」の発音がなかなか伝わらない上に、マダムたちのベリー地方訛りに圧倒され、暫し立ち尽くしてしまいました。そこへ、まさに救世主のようにバスの運転手が現れ、なんとか無事にノアンへ辿り着くことが出来たのでした。

サンドの館は、自由見学ではなく、ガイドの方がつきっきりで説明してくださり、書斎の棚に飾ってある鉱物の話で盛り上がったことを覚えています。去り際に、この後はラ・シャトールへ行くことを話すと、私もその方面へ行く用があるので送りますよと言われ、車に同乗することに。ラ・シャトールへ向かう道中、車窓から見える景色は見渡す限りの草原で、冬がすぐそこまで来ているフランスにしては、珍しいほどに明るい陽射しが射していたのです。まるで、



ノアンの館にて (2014 年 11 月)

サンドに歓迎されているかのような、緑の中にふわりと揺れる光のカーテンのようでした。

奈良にゆかりの和歌：『百人一首』より

百人一首は平安末期から鎌倉初期に生きた公家・藤原定家 (1162-1241) が選んだ和歌のアンソロジー (詞華集)。定家は、今年の大河ドラマの主人公・北条義時 (1163-1224) と一歳違いの同時代人です。『百人一首』というと、雅でのどかなイメージがありますが、貴族と武士が入り乱れて戦い、鎌倉政権成立後の 1235 年に、京都で編まれた歌集でもあります。日本では子供から大人まで幅広い世代の人に愛されてきましたが、近年は日本文化を愛好する人が増えて、海外でも知られるようになっていきます。今回は、誰しも聞き覚えがあつて懐かしと思われる、奈良にゆかりのある和歌を二首、ルネ・シフェールさんによる仏語訳とともに紹介します。日本には古の時代から、「月」や「花」を見つめて (contempler) ものを想う習慣があつたようです。別の土地から奈良を想った人たちの心のうちを想像してみると、私たちの心も少し奥行きが増してくるかもしれません。

「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出し月かも」(阿倍仲麻呂)

(現代語訳)「天を仰いでではるか遠くを眺めれば月が昇っている。あの月は奈良の春日にある三笠山に昇っていたのと同じ月なのだなあ」。作者の阿倍仲麻呂 (698-770) は、19 歳頃遣唐使として中国へ渡った留学生で、50 年以上唐の玄宗皇帝に仕えた。「春日」は、現在の奈良公園から春日大社までの土地。遣唐使出発の折に春日神社で旅の無事を祈ったとされる。

「いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に 匂ひぬるかな」(伊勢大輔)

(現代語訳)「いにしへの昔の奈良の都の八重桜が、今日は九重の宮中でひととき美しく咲き誇っております」。作者の伊勢大輔 (いせのたいふ) は 11 世紀前半の人。中宮定子のいとこ高階成順と結婚し、もと中宮の上東門院彰子に仕え、紫式部や和泉式部とも親しい間柄だった。作者は奈良から宮中に届けられた八重桜の献上品を宮中で受けとる役に藤原道長から抜擢され、その場で即興で詠んだ歌とされる。

La plaine du ciel
levant les yeux je contemple
est-ce bien la lune
qui se lève à Kasuga
dessus le Mont Mikasa

Le cerisier double
de Nara la capitale
des temps anciens
ce jour d'hui s'épanouit
au-dedans des Neuf Enceintes

《2021 年度第 6 回理事会報告》.....事務局 日時：2022 年 1 月 20 日 (木) 15:00～16:35。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、ジャメ、浅井、喜多、藺田、藤村、三木、杉谷。議題 1. 会員数：2022 年は 89 件でスタート。議題 2. 7/15 理事会後の活動：とくになし。議題 3. 今後の行事：(1/22) 第 149 回フランス・アラカルト「ドイツとフランスに暮らしてみよう」講師辻みち代。(5 月～6 月頃) 中之島美術館「モディリアーニ展」鑑賞会が次回美術クラブ例会候補。(6 月～7 月頃) シネクラブ例会開催予定。議題 4. 年次総会 (2/11)：(1/24) 総会案内発送、式次第と概要・2021 年度活動報告と決算報告・2022 年度役員改選・2022 年度活動計画・予算計画等確認。議題 5. Mon Nara。議題 6. その他：大阪日仏協会会誌に当協会活動紹介記事掲載。次回理事会 3 月 17 日 (木) 15:00～16:30「菜宴」。



編集後記 ☆日本を代表する花といえば桜 (cerisier)。とはいえその品種は 600 以上あって、南北に長く伸びる日本では開花時期も区々です。近年は気候温暖化の影響もあり、少しずつ開花時期が変化しています。「お花見に行こう！」と楽しみにしていたのに、いざ出かけてみるとすでに散っていたり、反対に開花が早まったおかげで以前は行けなかった桜の名所を訪れたり、ということもあるかもしれません。☆伊豆半島河津町の「カワヅザクラ」は、今年は 2 月中旬～下旬が見頃ようです。山里の川沿いに咲き揃う濃い鮮やかなピンクの花のトンネルの下を歩くと気持ちが晴れ晴れしそうです。☆なじみ深い「ソメイヨシノ」は、木全体が薄桃色の小さな花ですっぱりおかわれるまで少しずつ花数を増やし花が散ると若葉が芽を出して、日ごと変化していく姿が印象的です。☆山間地方に自生する「ヤマザクラ」には独特の風流な趣があります。「クマノザクラ」は 2018 年に日本の野生の桜として 100 年ぶりに新品種と確認されました。熊野地方の山間部や串本町・那智勝浦町の海岸部に生えています。☆奈良にはもちろん吉野山があり、その他各地に「枝垂桜」や「八重桜」の名所があることでしょう。☆こうして次々と花が咲いては散っていく 2 月～5 月は、多くの人にとって別れと出会いの時期でもあります。桜の木は、私たちの傍らにあって、言葉では表しがたい気持ちを包みこみ、寄りそってくれるような存在でもあることでしょう。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2022 年 6 月号は **5 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行) 又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行) に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2022 年 2 月号 numéro298

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司